

小垣内西遺跡発掘調査概要報告書・I



平成14年 3月

熊取町教育委員会

は し が き

古くから熊取野とよばれた本町域は現在まで変わることなく「熊取」として独立した地域を保持してきた町であります。

町内には重要文化財の中家住宅や降井家書院など江戸時代初期頃の文化財がありますが、他に42ヵ所を数える埋蔵文化財包蔵地があり、貴重な遺構や遺物が埋蔵されています。

熊取町教育委員会は皆様の御協力と御理解を得ながら、毎年50件程の緊急発掘調査を実施しています。この十数年埋蔵文化財発掘調査を実施し続けて多くの資料を得てきました。

本書は平成13年度に熊取町小垣内の宅地造成工事に伴って実施した発掘調査の報告書として作成したものです。今後多方面の研究に役立てられることを願っています。

最後になりましたが、本年現地での発掘調査にあたって御協力をいただきました土地所有者ならびに関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

熊取町教育委員会
教育長 甲田 太三郎

例 言

1. 本書は、永井織布株式会社による分譲住宅地造成工事に伴って平成13年度に熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係が実施した小垣内西遺跡発掘調査における概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川 淳を担当者として、平成13年6月11日に着手し、平成13年6月28日に終了した。
確認調査では、調査区をカラーリハーサルフィルムと白黒フィルムで撮影し、平板で調査区位置図(平面図)を作成、調査区壁面図を作成し、記録にとどめた。
3. 本書における図面の標高は、T. P.(東京湾平均潮位)を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
4. 本書における図面の土色は、『新版標準土色帖』第10版(小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版)を用いて目視により比定した。
5. 本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査員・調査補助員・作業員の参加を得た。
池上裕也、尾上智史、関井澄子、永橋祥之、前田公子、山本恵子
宇沢克之、太田敏治、岡本利市、坂本善成、橋本松雄、平阪博司
6. 発掘調査現場で使用した機械類は、田中重機の提供による。
7. 本書の執筆は熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳が行った。

目 次

第1章	地理的環境と周知の遺跡	
第1節	熊取町の地理的環境	1
第2節	熊取町の歴史的環境	1
第3節	周知の遺跡	3
第2章	調査の経緯	
第1節	小垣内	4
第2節	調査地点	4
第3節	調査の契機と試掘依頼	4
	試掘調査	5
	文化財保護法第57条の5第1項：遺跡発見の届出	5
	受託契約	5
第3章	小垣内西遺跡01-1区の調査	
第1節	層序	6
第2節	遺構	9
第4章	遺物	
	瓦質土器	10
	須恵器	12
	土師器	12
	瓦	12
	陶磁器	13
第5章	まとめ	
第1節	調査成果	14
第2節	溝SD1について	14
	小垣内の伝説『拾遺泉州志』	14
	小垣内をめぐる熊取の歴史(『熊取町史』を要約)	15
	過去の調査成果との比較	16
	柱穴状ピットSP1～SP3	17
	出土遺物と溝SD1	17

第1章 地理的環境と周知の遺跡

第1節 熊取町の地理的環境



熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約 4.8km、南北約 7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約 17.19km²を有する。地形による面積比を見ると、山地 41%、丘陵 24%、段丘 23%、低地 12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別に見ると、町南部においては、泉南地域の基本山地の和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。町域に水源を持つ河川は雨山川・和田川・大井出川・見出川の4水系が存在している。いずれも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているため

に年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることが出来る。

第2節 熊取町の歴史的環境

町内の遺跡は現在42カ所を数える。

縄文時代以前の遺構は発見されていないが、東円寺跡の所在する熊取町野田の町立中央小学校で縄文時代早期の有舌尖頭器と石鏃が検出されているので、東円寺跡は縄文時代からの複合遺跡である。

弥生時代の遺跡も発見されていない。JR熊取駅のある大久保における駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査では畿内第V様式を示す土器が大量に検出され大久保E遺跡となったが、その土器は古墳時代初頭の所産と考えられている。

古墳時代の遺跡は、初期の大久保E遺跡以外知られていない。

飛鳥時代については、平成10年度の久保城跡98-1区の調査で複数の溝が検出され、その中から飛鳥V様式といわれる土師器や須恵器が出土した。

奈良時代についてはこれまで東円寺跡87-1区の調査で建物4棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみにとどまっていたが、平成11年7月熊取町七山で西暦750年以降の奈良時代を示す多くの須恵器が宅地開発の発掘調査で検出され、熊取町第41番目の「七山東遺跡」となった。

平安時代については、野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された軒瓦の比較考察から平安時代末とされている。また平成8年度には大久保から紺屋にかけての私立病院の発掘調査で黒色土器や須恵器、土師器が自然流路内から検出されている。

熊取町遺跡分布図

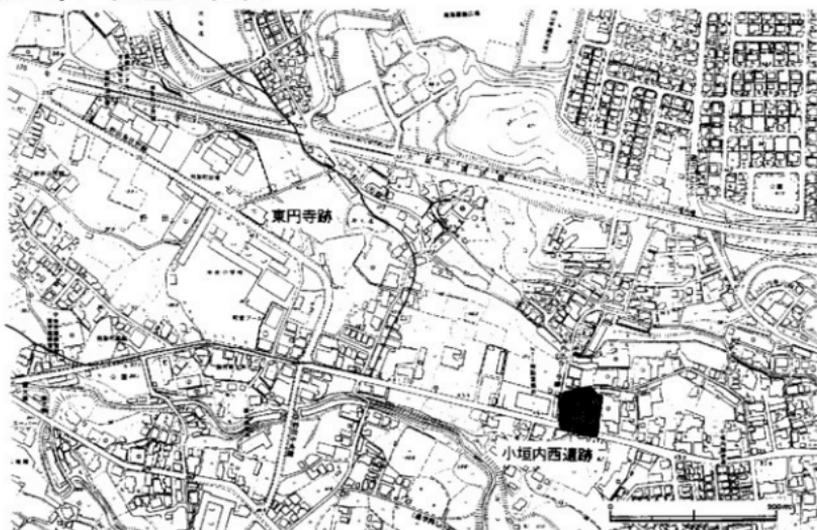


鎌倉時代以降中世に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示している。野田の東円寺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出されている。

第3節 周知の遺跡

No.	周知の遺跡名	種類	時代	地目	立地	主な成果等	
1	降井家書院	建造物	室町～江戸	宅地	平地	国指定重要文化財	
2	中家住宅	建造物	室町～江戸	宅地	平地	江戸期から明治期頃の陶磁器等出土	
3	東迎寺本堂	寺院跡	鎌倉	倉	丘陵	15～16世紀の土師器を検出	
4	池ノ谷遺跡	散布地	旧石器	水田	平地		
5	甲田家住宅	建造物	江戸	宅地	平地		
6	東円寺跡	寺院跡	弥生～江戸	宅地	平地	縄文・奈良・鎌倉～室町・江戸の複合遺跡	
7	城ノ下遺跡	城郭跡	室町	宅地	丘陵		
8	成合寺遺跡	墓地	室町	畑地	丘陵	14世紀代の600基以上の土塚墓群等検出	
9	高蔵寺城跡	城郭跡	室町	山林	山頂	土塁・堀切等の構築物を確認している	
10	南山城跡	城郭跡	鎌倉	山林	山頂	月見ノ亭・馬場・千疊敷の地名が残る	
11	五門遺跡	散布地	古墳～江戸	宅地	丘陵	須恵器等を採取するも現在消滅	
12	五門北古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	古墳参考地、現在消滅	
13	五門古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	古墳参考地、現在消滅	
14	大浦中世墓地	墓地	室町	墓地	平地	享徳4年銘(1445)の五輪塔の地輪出土	
15	久保城跡	城郭跡	鎌倉	倉	水田	平地	的場・矢ノ倉等の字名、瓦器片多数出土
16	山ノ下城跡	城郭跡	鎌倉	倉	宅地	平地	
17	大谷池遺跡	散布地	古墳～江戸	池	平地		
18	祭礼御旅所跡	祭礼跡	室町	山林	丘陵	五門・紺屋共同墓地	
19	正法寺跡	寺院跡	鎌倉	倉	宅地	丘陵	
20	小垣内遺跡	寺院跡	江戸	道路	丘陵	毘沙門堂跡、現在消滅	
21	金剛法寺跡	寺院跡	室町	宅地	平地	大森神社神宮寺、現在消滅	
22	鳥羽殿城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵		
23	轟ノ谷遺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵		
24	花成寺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵		
25	降井家屋敷跡	屋敷跡	室町～江戸	宅地	平地	敷地を区画する溝や江戸初期の陶磁器等	
26	大久保A遺跡	散布地	江戸	宅地	平地		
27	下高田遺跡	桑田跡	鎌倉	倉	田	平地	
28	大久保B遺跡	集落跡	弥生～江戸	宅地	平地	弥生末～古墳初中心の遺物出土	
29	紺屋遺跡	散布地	古墳～江戸	宅地	平地	奈良～平安期の河川跡検出	
30	白田谷遺跡	散布地	室町～江戸	田	谷		
31	大久保C遺跡	散布地	室町～江戸	宅地	平地		
32	千石堀城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	天正年間(1573～92) 鎌賀衆徒の城跡	
33	口無池遺跡	散布地	平安～江戸	宅地	平地	平安末～鎌倉初の遺構・遺物検出	
34	大久保D遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地		
35	大浦遺跡	散布地	鎌倉～江戸	田	平地	13～14世紀の瓦器等出土	
36	久保A遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地		
37	久保E遺跡	集落跡	弥生～江戸	宅地	平地	弥生末～古墳初遺物多数出土	
38	大久保B遺跡	集落跡	鎌倉～江戸	宅地	平地	13～14世紀の瓦器等出土	
39	中家住宅周辺遺跡	集落跡	室町～江戸	宅地	平地	江戸期以降の陶磁器等多数出土	
40	朝代北遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	鎌倉時代以降の遺物の包含層	
41	七山東遺跡	散布地	古墳～室町	宅地	平地	奈良時代の須恵器を多量に含む包含層	
42	小垣内西遺跡	集落地	奈良～室町	宅地	平地	幅10m以上の溝、瓦、柱跡など	

第2章 調査の経緯



第1節 小垣内

小垣内は熊取町の中央部やや東寄り、熊取町大森神社と熊取町役場の中間地帯である。国道170号に沿って貝塚市水間寺に抜ける街道沿いには、土壁を使った比較的古い街並みが見られる。熊取町では五門の中家と大久保の降井家という江戸時代の大家屋が広く知られており、それぞれ重要文化財に指定される広大な屋敷地が残っているが、小垣内にはその規模・由来ともに匹敵するような旧家は残らない。

第2節 調査地点

小垣内西遺跡は熊取町の中央部やや東寄り、旧国道170号線で貝塚市水間寺に抜ける水間街道が通る熊取町大森神社と熊取町役場の中間地点で、今回の調査地点の熊取町小垣内一丁目110-3、117は、小垣内の古い街並みの西端、旧N T Tビルの東隣接地である。総面積1,860.07㎡の分譲住宅造成地である。

第3節 調査の契機と試掘依頼

申請地：熊取町小垣内110-3、117

開発者：株式会社永井織布 和歌山県日高郡南部町大字西岩代1543番地

工事の概要：宅地造成

試掘依頼受付日：平成13年5月14日

遺跡名：埋蔵文化財包蔵地外

試掘調査

調査日：平成13年6月11日

調査の手段：機械掘削

トレンチの数：4本(帯状：平均1.5×3m程度)

調査結果：トレンチ1で溝状の遺構、トレンチ2で柱穴状の遺構を確認。

試掘後の処置：本発掘調査

トレンチ1ではGLマ付±0.8m付近のトレンチ壁面に人為的な溝状の落ち込みを発見し、さらにトレンチ1底面に溝状のひろがりを確認した。相当規模の溝状或いは堀状遺構と判定、その他土器なども検出するに及んで新規に埋蔵文化財(遺跡)の発見と断定した。

文化財保護法第57条の5第1項：遺跡発見の届出

提出日：平成13年6月20日

申請者：株式会社永井織布

申請地：熊取町小垣内110-3、117

遺跡名：小垣内西遺跡

小垣内西遺跡はその遺構の規模や性格からすると、今回の調査地点を中心として最低でも約500m四方(2km²)に対して範囲が存在するものと考えられるが、周辺地での過去の試掘の実績がなかったことと、昨年の遺跡捏造問題が厄となり、大阪府教育委員会文化財保護課によって新規の遺跡の範囲は最低限度に抑える旨の指導を受けた。今回小垣内西遺跡の範囲指定は申請地のみ約2,000m²にとどまった。

受託契約

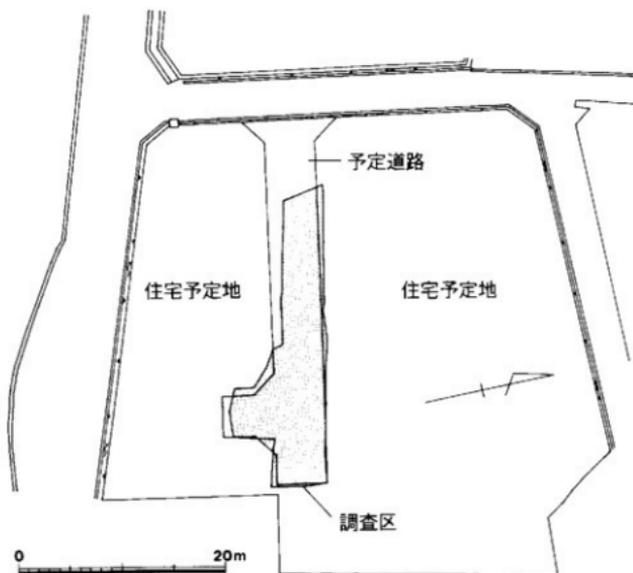
協議の内容：宅地開発の進入道路部分においては地下の配管工事等によって埋蔵文化財を破壊する危険性があると判断されるため、進入道路部分に対してのみ本調査を実施して、地下の遺構の記録保存や土器などの埋蔵文化財を検出することに同意を得、本町教育委員会による受託事業とした。

なお住宅部分については、現況に対して盛土をするのみであるということ、その上で住宅建設時には比較的深度の浅い基礎工事が行われる見通しであるとの説明であったため、今回の本調査の対象外とし、埋没保存することと決定した。今後個人住宅として開発される際には個々に補助事業等で対応する旨を確認した。

受託契約日：平成13年6月15日

契約先：株式会社永井織布 和歌山県日高郡南部町大字西岩代1543番地

第3章 小垣内西遺跡01-1区の調査



調査地 小垣内西一丁目110-3,117

調査期間 平成13年6月18日～27日

第1節 層序

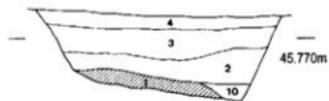
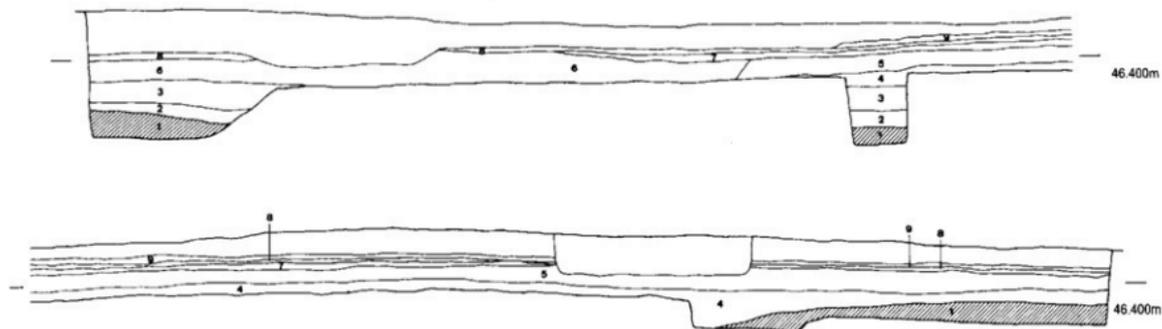
小垣内西遺跡01-1区で検出した壁面土層を分層した。(最下層の地山から)

- ①10YR 7/8 黄褐色 粘質土地山
- ②10YR 7/3 にぶい黄橙色 粘質土 (近現代の耕作土)
- ③現代の耕作土

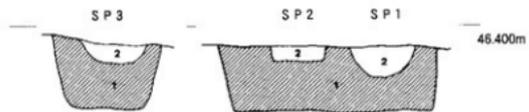
古代の層、中世の純然とした包含層は観られない。

古代及び中世の土器破片を含む層④～⑧が調査区全体に存在するが、これらの層は遺構(溝SD1)の埋土で、熊取町でよく観られる瓦器を多く含む耕作土系の包含層よりは少し新しい感がある。室町時代後半もしくは近世初頭のものか。

中世の中盤以前の層は整地で削られてしまったのではない。遺構SD1の存在からすると、中世の後半頃に大掛かりな造成工事があり、それまで存在した中世以前の層が地山①まで削られた後、SD1の廃棄で埋土④～⑧で埋立てられたのではないかと推察される。またこの④～⑧層には古代～中世の土器を含むことから、SD1を開鑿した際に出た大量の排出土であり、付近のどこかに放置もしくは使用されていたものが再び埋土に使用されたものと考えられる。

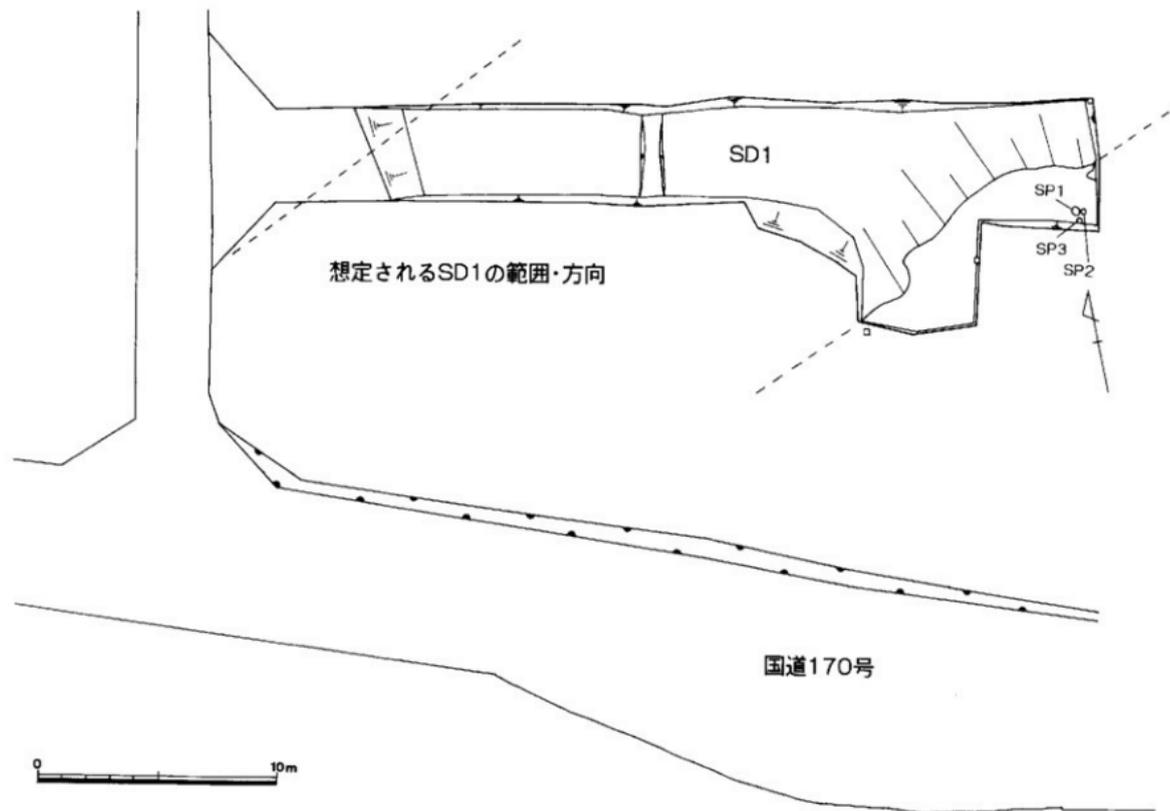


溝SD1断面



①10YR6/8 明黃褐色 粘質土(地山)
②N6/1 灰色 砂質土





SD1の埋土(下から)

- ④N6/灰色粘質土盛土(造成埋立て土)
- ⑤7.5YR 5/2 灰褐色粘質土盛土(造成埋立て土)
- ⑥2.5YR 赤灰色粘質土盛土(造成埋立て土)
- ⑦10YR 7/3 にぶい黄橙色粘質土盛土(造成埋立て土)
- ⑧10YR 7/2 にぶい黄橙色粘質土盛土(造成埋立て土)

SD1の埋土は大きく5層に分けられる。見た目に違いがはっきり判るが、それぞれに時間的な差異は感じられない。個々の埋土を構成する土の質・成分によるものであろう。あるいはSD1には溜水があったため、その埋め立てに使われた土砂の大きさなどの順番に沈殿堆積したものかもしれない。

第2節 遺構

溝SD1

道路敷設部分に設定した東西方向の細長い調査区に対して、同じような東西方向に開鑿された溝状で検出された。東肩はうまく検出したが、西側の肩は当初に検出したものの、実測を待たずに調査中に埋立てられてしまったので、図では点線による復元に留めている。

おそらくは遺構面上で幅約10m、最深部の深さ約2m、両肩部は緩やかな傾斜面となり、中央部が一段低く四角く掘りぬかれた形状であろう。中央の深い部分の両側には木杭を使った護岸(矢板)がされていた可能性が高い。埋土④～⑧はほとんど同種の粘質土で、おそらく中世の後半のある時期に一気に埋め立てられたものである。埋土には瓦器碗破片や瓦を多く含む。近世以降の遺物は見られない。

このSD1の形状については調査区の中央部にトレンチを一本開けてその断面を観察することで把握に努めたが、SD1が余りに巨大であること、その総ての埋土④～⑧を遺構検出で排除することは非常に困難であり、住宅開発という工事の性格等を考慮し、遺構の肩部の平面的検出にとどめ、SD1を完全に検出することを諦めざるを得なかった。無論その後の当該工事でこのSD1は破壊されず、そのまま埋没され保存されている。

柱穴ピットSP1～SP3

掘立て柱跡SP1～SP3は調査区の東端の地山面上に検出された。いずれも埋土は同質で、灰色砂質土②一層である。深さは約10cm程度と浅い。SP1～SP3は掘立て柱の3度の立替えを示すものと思われる。ただし調査区外は一切調査していないので、SP1付近に他に同様の掘立て柱跡が存在していたかどうかは全くわからないが、それらが集まって掘立て柱建物を構成していた可能性はある。土色から、12～14世紀代の掘立て柱の痕跡とは少し違っている感じがした。あるいは15世紀以降の室町時代後半の所産か。SP1からは瓦質土器破片1点が出土している。

第4章 遺物

瓦器	碗69、皿3、羽釜9、甕5、三足釜2、鉢3	91
古代土師器	甕1	1
中世土師器	羽釜10、皿3、碗7、鉢1、器種不明48	69
古代須恵器	坏3、蓋4、高坏1、壺2、甕1、碗1、不明3	15
中世須恵器	甕4、鉢3	7
瓦	軒丸瓦1、丸瓦4、平瓦11、不明10	26
中世陶磁器	白磁碗2、青磁碗4、丹波系甕3、備前甕1	10
近世陶磁器	伊万里碗6、唐津碗2、瀬戸美濃系碗1、鉢1	10
中世木製品	杭4、不明1	5
近現代陶磁	碗6	6
土製品	土錘1	1
合計		241

※点数は接合前の破片(断片)の状態で計算

遺物

今回の調査では古代の須恵器破片から近世の陶磁器までのパレティを検出した。出土した遺物で最も大きな瓦片を占めるのは瓦質の土器であり、瓦器碗の観察結果から、本遺跡の中心は13世紀中頃～14世紀中頃と考えるべきだろう。遺構SD1は早くとも15世紀以降の所産であると推定されるため、これらの瓦器はその前代の小垣内を物語る遺物ということになる。多くの瓦器を使用した中世の小垣内集落の一角の今回の調査地点は、室町後半期にSD1を開鑿した大きな土木事業によって相当の変貌を遂げたと思われる。

瓦質土器

①瓦器碗

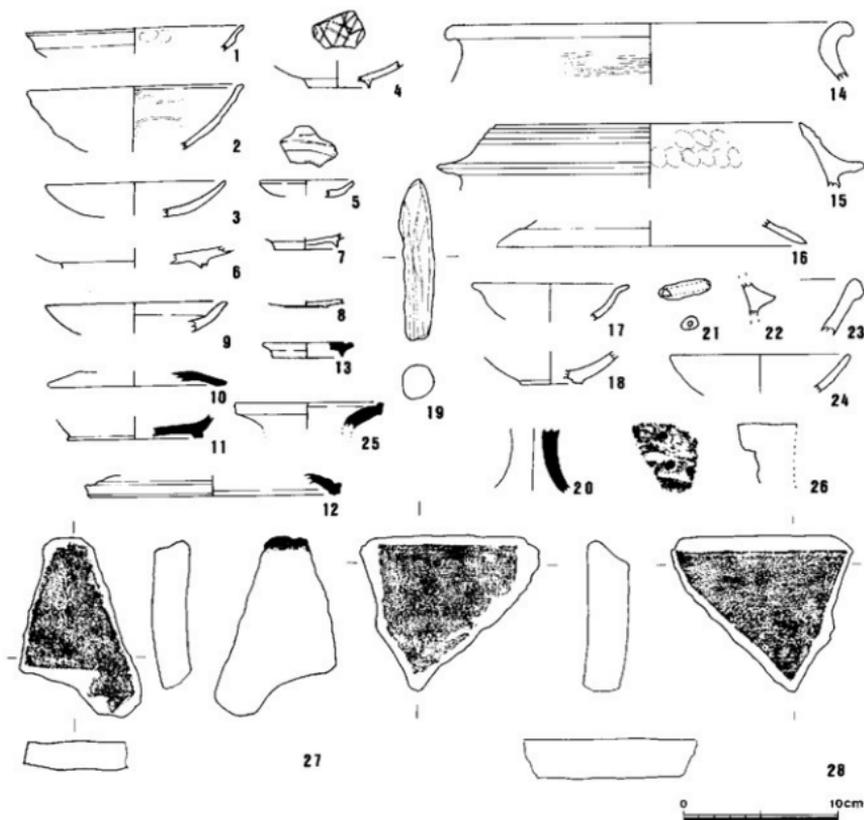
高台の断面が大きな台形のもの6が出土しており、いわゆる黒色土器か初期の瓦器碗と思われる。2は尾上氏編年Ⅲ-1期頃のものか。外面の口縁下に2条の沈線状の凹帯が巡る。高台は三角形。8は非常に退化した碗の高台でⅣ-1期頃。7は逆台形から三角形へ退化途中位の高台でⅢ-3期頃か。4は見込みに渦巻き状の暗文があり、断面三角形の高台。他は尾上氏編年Ⅲ-2期～Ⅳ-2期頃と年代幅が広い。暗文は明瞭なものが乏しい。

②瓦器皿

10は内面に暗文の痕跡がある。器壁は薄い。11は非常に厚手である。11は外面口縁下に凹帯が1条巡る。

③瓦質羽釜

羽釜は15、22が実測可能で、15は二次焼成の赤変が著しい。22は罎部であるが、外面の罎下に僅かに二次焼成があるようだが、全体は灰銀色に光沢を留めており、僅かに使用し



ただで破損し捨てられた個体であろう。

④瓦質三足釜

19は三足釜の脚部1本のみで、熊取町野田の東円寺跡出土品と相違がないので同時期の所産であろう。

⑤瓦質甕

14は外面に横方向の短い斜線が単位で観られる。内面にはカボンがない。

⑥瓦質こね鉢

23はこね鉢で、内面に粗シタはなく摩耗が激しい。

須恵器

須恵器の出土は比較的多い。古代のものが15点、中世のいわゆる東播系が7点数えられる。

古代の須恵器は熊取町七山東遺跡99-1区で多くの破片が出土しており、類似している。今回も古墳時代のものはない。いずれも奈良時代の後半のものであろう。

①高坏

20は須恵器高坏の脚である。横方向にナデが観られる。また内面にも同様のナデが観られるが、これは指を突っ込んで回したものであろう。

②蓋坏

12、10は蓋坏の蓋である。12は750年頃の平べったい蓋で、上面に自然釉、下面は須恵質の露胎。焼成は極めて良好であったらしく、断面は3層状に観え、中央が赤褐色に変色した備前焼のような状態である。10は12よりも丸味を帯び、器高が高い個体。11は身(坏)の方である。高台があり、750年前後の年代が与えられるだろう。

③壺

25は壺の口縁部で、端部をつまみあげた形状である。

中世須恵器では、東播系の鉢、甕がほとんどである。また丹波系の外面自然釉の大型の甕の破片が3点あるが、その産出地についてはまだまだ再考を要するだろう。

土師器

古代の須恵器の出土と符号するように、明らかに古代のものと考えられる土師器の甕の口縁部分1点があった。口縁は外反してつまみあげている。熊取町久保の久保城跡98-1区出土の古代土師器甕との比較からおそらく奈良時代期のものではなかろうか。

16は器種等の判然としないものであるが、黒い煤が見られる側を外面とするならば、裾広がりの土器であると思われる。煤が付着する使用用途と考え合わせて、古代の土師器の蓋ではないかとみている。

他の土師器は中世のものである。

片口のような注ぎ口をもった鉢が1点出土している。

碗は薄手で、木製の碗を模倣しているものと思われる。

瓦

今回出土した軒丸瓦26は、野田の東円寺跡出土以外の中世の軒丸瓦として、ほぼ初めての出土であることが評価できる。残念ながら瓦当面の中心部分を欠いているが、外区の部分には巴文軒丸瓦瓦当面に通常観られる同心円状の突起が一行で規則的に一周巡っている。

今のところ26は巴文軒丸瓦なのか判然としない。瓦当面の残存部の最も中心に近い部分は、無紋のまま割合広く残っており、渦巻く巴の尾は見ることができない。この部分は蓮華文の花弁の先端部分のようにも思えるが確定的ではない。もしも蓮華文軒丸瓦であるとすれば、熊取町遺跡群では平安時代末期頃創建とされる野田の旧東円寺出土瓦以外で初めての出土となり貴重である。ちなみにこれまで野田の東円寺跡から出土している蓮華文軒

丸瓦には外区に同心円文帯が一切ない。或いは蓮華文軒丸瓦から巴文軒丸瓦に移行する境界期の所産であろうか。他の出土遺物の推定年代も幅が広いため確証となり得ず、26の年代判定は今後の課題としておく。

また小垣内西遺跡から出土した他の瓦の破片には二次的に焼けて赤変した個体が多いことも付け加える。あるいはこれらの瓦をもった建物は中世の間に焼亡したのであろう。

平瓦

27は分厚く、外面端部のみ黒色化しているのので、製作上の方法などを類推することができる。28は上面が砂粒、下面が灰銀色の光沢。分厚く、端部を面取りしてあるもので、特徴は16世紀頃を示している。

陶磁器

白磁の碗が2個体分出土している。17は「太宰府条坊跡Ⅳ」における白磁碗Ⅸ類・2であると思われる。12世紀後半の年代が考えられる。

青磁碗破片も4点ほど出土している。24は明らかに15～16世紀頃の青磁で、広がった浅い碗である。おそらく雷帯文があったことだろう。

9はやや黄味がかった白色を呈する皿状の土器で、一見白土器としてしまいそうだが、胎土をよく観ると、粒の間に微少な空間があり、瀬戸・美濃系の土器ではないか。

18は唐津系の碗の下体部で、縦長の底の丸味を帯びた個体であろう。

第5章 まとめ

第1節 調査成果

- ①小垣内は明らかに古い集落にも拘わらず、これまで埋蔵文化財包蔵地を見出すことがなかった。しかしついに今回の調査で野田に展開する東円寺跡などと同様の古代～中世の遺物を検出した。
- ②今回出土の須恵器や土師器の破片と、野田の東円寺跡における数々の調査で出土した古代須恵器の存在から、小垣内地域も奈良時代頃には完全に開かれていたと考えられる。
- ③また瓦器の出土が多く、瓦器の比較検討をした結果、13～14世紀頃における近隣の旧東円寺(現在の野田地域)周辺との共通性を指摘できる。
- ④今回の小垣内西遺跡01-1区では16世紀前後に大きな変革期を向かえた形跡が濃い。古代から中世をとおして営まれた包含層等がすべて削り出され、巨大な溝SD1が開鑿された。
- ⑤溝SD1の用途は推定の域を出ない。史料に見られる16世紀前後に小垣内に居館を構えたと思われる行松氏の館を囲んだ堀状の溝ではないか。
- ⑥また江戸時代以降の遺構も皆無であった。おそらく農地になっていたのであろう。このことは⑤と合わせて、16世紀前後に溝SD1を要した者が17世紀を待たずに当地を去っていったことを示していると思われる。

第2節 溝SD1について

今回の小垣内西遺跡01-1区の調査の成果は、なんとといっても巨大な溝SD1である。そしてこの溝SD1は土層観察から15～16世紀の間の所産であると考えらる。小垣内の西部で中世の終盤に誰が何の目的でこのSD1を開鑿したのかを知るために資料を掲げた。

小垣内の伝説『拾遺泉州志』

「小垣内村、むかしは、大垣内とかきて、おほがちの里という、ここにおほがち長者ちふ豪農ありし、いづみの国四長者(おほがちの長者、とくまむ長者、かげやま長者、ぐむまち長者)の一人なり。今長者やしきとて田の字にいり。此むらの東、小川を隔て、正福寺ちふ寺ありし。今小堂ひとつに、地藏菩薩の石像を安置す。是のみむかしの遺物にして、天正の兵火をも幸にのがれたりしなり。この刹はかの、おほがち長者一建立の寺にて、又このすこし東、しらぢの谷ちふところに一精舎ありし。是を正法寺といふ。時の人、この正法寺をめであらといひ、正福寺ををであらといへるは、正法寺八長者の妻が一建立なりければなり。ただし今、証拠・古記等はつたはず、ただ俚言俗伝のみなり。天和に、この村中の山に、寺一字を創建せし時に、この寺号をひきて、正法寺といへるなり。かの地藏みだけ、二尺余面容奇古にして、実に今のものにあらず。ただしこの石像をつくりし時は、既にこの二院とも破壊して後のことなり。ただし、ひとはすむやすまらずやには、なりながら、なほ堂宇は僅かにのこりたりしとみえて、貞和に兩城を取立したとき、この正福寺の方丈をこぼちとりて、北の岡の矢倉にかきあげしことは、かの城縄張の人足帳にしるしぬ。」

要約すれば、小垣内には「おほがち長者」と呼ばれる豪農がいたことになる。「おほが

ち」は「大垣内」であったといい、四方に大きな堀を巡らした長者だったことになる。和泉国には4人の長者がいたが、そのうち一人が熊取町小垣内に住んでいたという。

この『拾遺泉州志』にある正福寺・正法寺という寺は実在だったことがわかっている。『拾遺泉州志』中の小川とはおそらく見出川であり、小垣内から見てその見出川の対岸とは今の大森神社付近であろう。大森神社付近の発掘調査では中世の瓦が出土している。また大森神社の真北の丘陵は現在五月丘という住宅街になっているが、この丘陵上西端に「建武地蔵」と呼ばれる地蔵が小堂に安置されている。この石造物には西暦1337年(建武四年)の記年銘がある。この小堂のある五月丘は近年になって切り開かれた丘陵であるため、建武地蔵自体は昔は別の場所にあったのは確実である。町内には今でも正福寺座という組織があって、この石造物を懇ろに祭っている。

小垣内をめぐる熊取の歴史(『熊取町史』を要約)

古代熊取を誰が領有していたのかは判然としていない。領有者が確実になるのは中世になってからで、1334(建武元年)弘の乱の恩賞として、建武新政権後醍醐天皇の綸旨で、現在の和歌山県湯浅に本拠があった**木本(湯浅)宗元**という南朝方の武將に熊取庄地頭職が与えられた。下地中分状態になり、沙汰人(悪党)熊取庄荘官の高向善三貞茂と五郎左衛門入道成真の2名と新地頭木本宗元の間で訴訟問題が多発したという。

1369(応安2)年には南朝の楠木正行の弟の楠木正儀が和泉国守護になる。従って配下の**橋本正督**が守護代として熊取に赴任してきた。橋本正督は熊取の南部の雨山に城郭を建設し(雨山城跡)、熊取一円を支配したと考えられる。

1378年(永和4)年室町幕府により山名氏清が和泉国守護となり、翌1379年**山名氏清**が雨山・土丸城を攻撃して、橋本正督は討死した。熊取は山名氏の支配下となる。

1391(明德2)年明德の乱が起こり、山名氏は**大内義弘**に敗北し、翌1392年大内義弘が和泉・紀伊両国守護となったので、熊取は大内氏の支配下に入った。

1399(応永6)年応永の乱で大内義弘が敗北して九州へ逃亡し、代わって仁木義員が和泉国守護となった。続いて1407(応永14)年足利義満の寵童の御賀丸が和泉国守護となった。

1408(応永15)年細川頼長が和泉国上守護に、細川基之が下守護の**両守護制**となる。この体制下、熊取谷大垣内(現在の熊取町小垣内)に本拠をもったとされる**国人(熊取衆)の行松氏(盛吉)**が、和泉国守護細川氏の守護被官として熊取を給与された。またこの頃の熊取には他に国人「熊取八郎」がいたとされているが詳しいことはわかっていない。両守護制は1531(享祿4)年下守護の細川九郎が敗死することで、上守護細川元常により統一された。

16世紀前半の熊取は、和泉国守護細川氏と根来寺・粉河寺勢力が二分していたとされる。1504(永正1)年には守護細川氏と根来寺の半済が成立している。根来寺は1141(保延7)年**高野山**座主覚鑿によって開かれ、1288(弘安11)年には頼諭が大伝法院を根来に移転した。1337(建武4)年足利尊氏が和泉国「信達庄」を根来寺に寄進することによって、紀伊国から和泉国にも進出していった。1370年頃の蜜巖院主の聖蓮坊善慶は熊取出身であった。15世紀には加納入地が加わりさらに拡大して、紀伊国守護島山氏と戦闘状態に入るなど大きく発展した。この頃には熊取をはじめ紀北、泉南、河内の土豪層が根来寺山内に

次々と坊院を建立し、大塔が建立した16世紀以降は高野山を凌ぐ強大な勢力を誇ったといわれる。従って根来勢力と行松氏は熊取内で度々衝突し、1504(永正元)年行松氏の大垣内の館は放火され焼亡した。

しかし1549年(天文18)年、細川本家(京兆家)の細川晴元と和泉国守護細川元常が、摂津江口で三好長慶と戦って敗北すると、和泉国守護細川家の被官行松氏は1551(天文20)年熊取谷大垣内の屋敷地、茶園、田畑を中家と根来寺成真院に売却し退去した。

その後の大垣内について、中家から根来寺山内の成真院に務めに出ている中(根来)盛重は、1585(天正13)年羽柴秀吉の根来攻めで敗北した時に、大垣内に引揚げたとされていることから、五門に本拠のある中家の屋敷地が大垣内にもあったことが考えられる。この秀吉来襲時には熊取中が延焼したとされるため、大垣内だけが戦禍を免れたとは思えず、おそらく火災にあったことだろう。根来盛重は関ヶ原の合戦以前から徳川家康に仕え、旗本となったが、大和国宇智郡(奈良県五條市)に750石の知行地を得て移っていった。大垣内はおそらく熊取に残った中家本家が引継いだのだろう。先の「おほがち長者」はこの根来氏であったともいわれている。

中(左近)家は16世紀前後から現在の熊取町五門の重要文化財中家住宅の地に屋敷地を構えたようであるが、熊取一帯に広大な土地を所有し、小垣内も農地として領有したのだろう。1619(元和5)年熊取は岸和田藩領になったが、いぜんとして中家は郷土代官として熊取15ヵ村を折半支配した。

過去の調査成果との比較

熊取町内でのこれまでの発掘調査では、平成元年のJR熊取駅前の区画整理事業に伴う大久保E遺跡89-1・90-1・90-2区の調査で年代不詳の巨大な溝が検出されているが、幅が5mを超えるような規模の溝はその一例のみである。野田の東円寺跡でも多くの溝が検出されているが、検出された溝群は中世の耕作に伴う用水路的なもの(最大で幅3m程度、深さ1m程度)と、建物の周囲に巡る細くて浅い溝(最大で幅約30cm、深さ20cm程度)があるが、今回のSD1とはまるで規模が異なる。

以下に大きな溝の一般的な3つの事例をあげる。

①農業用水路

いつの時代も農業の用水路の拡充は重要であったために、大規模な工事を行って用水路を開鑿したものと思われる。発掘調査で検出される大きな溝は農耕のための用水路であるケースが多い。

②中世の居館の堀

次に想いつくのは中世の居館に見られるような四角い周濠である。調査区東端の掘立て柱跡と考えられる遺構SP1～SP3が中世の建物跡であるとすれば、このSD1が居館の周濠である可能性がある。

③古代の溝(古墳の周濠などを含む)

熊取町久保の久保城跡98-1区の調査では飛鳥時代頃に開発された溝が3本検出されている。それらの規模は最大でも幅約4～5m程度のものであり、断面形態に今回のSD1

との相違が観られる。最近の熊取町における調査で、熊取町の各地は西暦680年頃の飛鳥時代や750年以降の奈良時代から開発が始まったのではないかと推定できるようになってきたが、今回の小垣内西遺跡01-1区付近もそれらの例に漏れることなく、古代須恵器の出土からしても、おそくとも奈良時代には開発が開始されていたと考えられる。調査区の大半を占有するように検出されたSD 1も久保城跡98-1区の溝同様の目的で奈良期に開鑿されたのかもしれないとも考えたが、現地での状況観察からは中世後期もしくは近世への過渡期頃の所産であるとの確信をもっている。

柱穴状ピットSP1～SP3

またSP1～SP3は調査区の東端の地山面上に検出された掘立て柱跡で、埋土の観察から15～16世紀頃のものという所見をもった。この掘立て柱群が建物を構成していると考えれば、SD1と深く関連しているものと考えられる。従ってSD1が開鑿された年代も15～16世紀頃であり、一連の遺構は中世後期の居館のなんらかの施設とその周濠であるとも考えられる。

出土遺物と溝SD1

小垣内西遺跡01-1区からは、瓦破片が比較的多く検出された。付近に瓦葺きの建物が存在していたことが確実である。平瓦はおおよそ15世紀以降16世紀頃の所産と推定される。

熊取町五門には近世に大庄屋であった中家の重要文化財中家住宅があるが、これまで数度の調査を実施しており、多くの瓦破片を検出している。しかし中家住宅では17世紀初頭以前の中世の瓦破片は一切発見されていない。

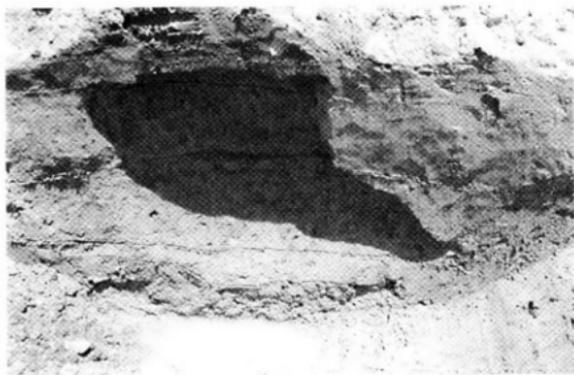
このことは中家とともに近世大庄屋であった大久保の降井家付近の調査でも同様である。

近世に富裕を誇った大庄屋の所在した場所でも中世には瓦葺きの建物がなかったわけであり、町内で他に中世の瓦破片を検出するのはいずれも寺院(もしくは堂)があったと考えられる場所であることから、小垣内西遺跡が発見された当地点にも中世後半の16世紀の前後に寺院関連の建物があつたとも考えられるだろう。

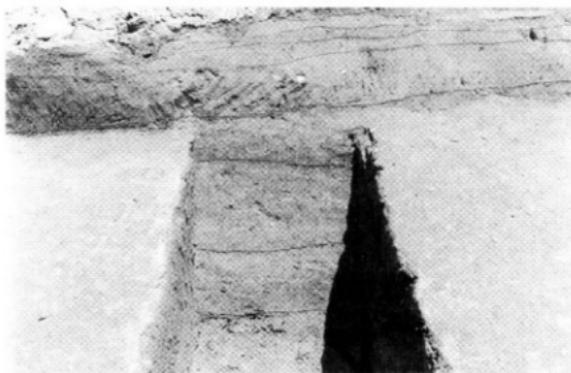
また前節でも述べたとおり、溝SD1やピットSP1～3が16世紀頃の遺構であるとするならば、出土した瓦類は、15世紀終盤から16世紀中盤まで熊取小垣内に屋敷を構えた泉国守護細川氏の代官行松氏の居館の屋根を飾った瓦類であった可能性が存在する。



小垣内西遺跡01-1区 調査区



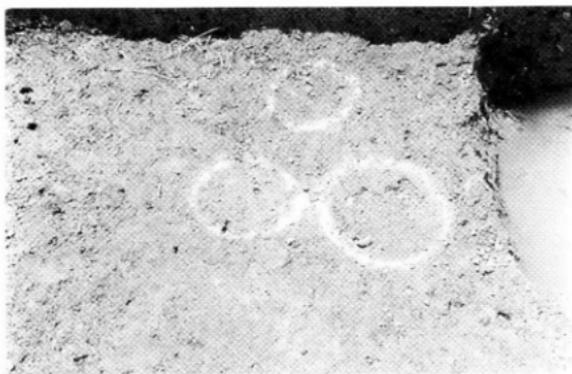
調査区壁面



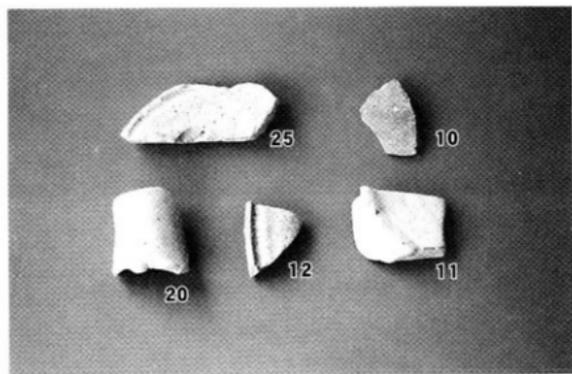
溝SD1トレンチ断面



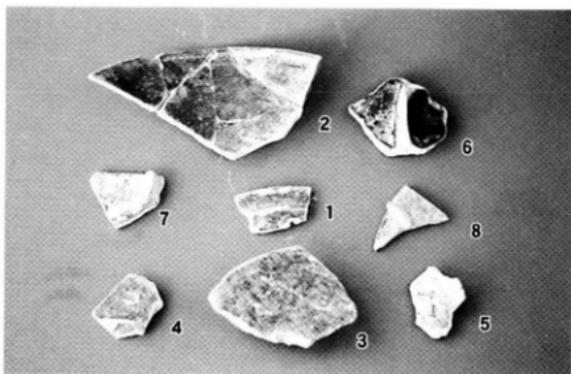
調査区東南部壁面



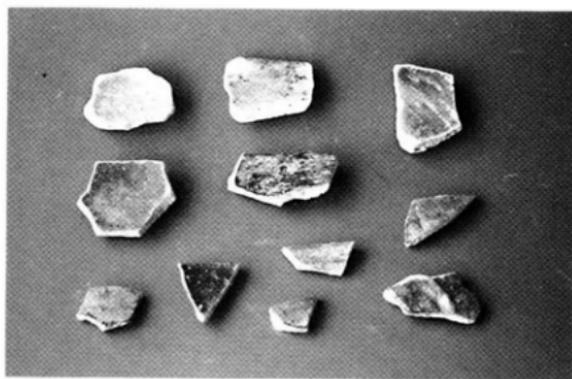
柱穴状ビット検出状況



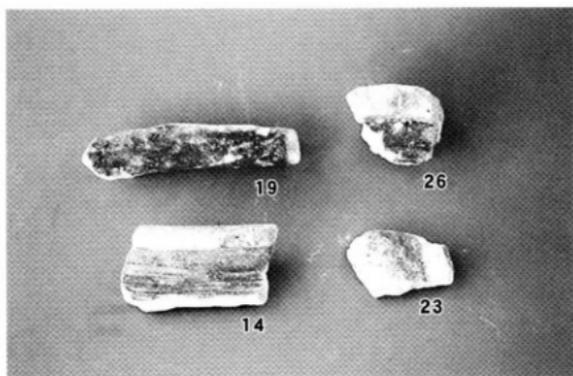
古代の土器



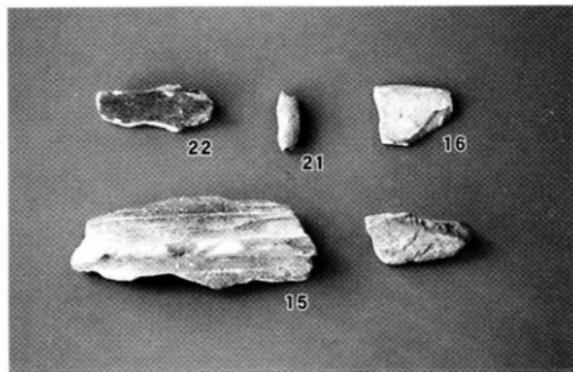
瓦器



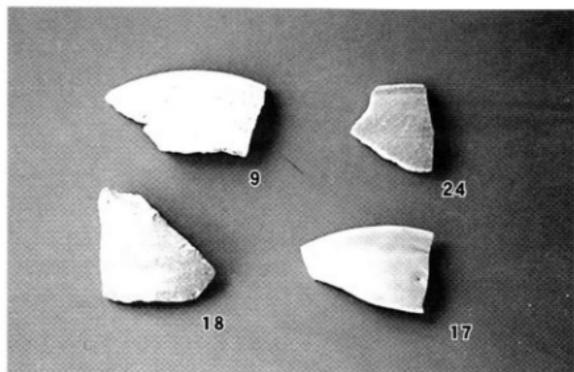
瓦器



瓦質土器



土師質土器



陶磁器ほか



瓦類

報告書抄録

ふりがな	おがいとにしいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	小垣内西遺跡発掘調査概要報告書							
巻次	I							
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第39集							
編著者名	前川 淳							
編集機関	熊取町教育委員会							
所在地	〒590-0495 大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号							
発行年月日	西暦 2002年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査 面積m ²	調査原因
小垣内西遺跡 01-1区	大阪府泉南郡 熊取町小垣内	27361	40	34°23'42"	135°21'47"	20010611 20010628	145.7	宅地造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小垣内西遺跡 01-1区	集落	奈良～室町時代	溝(堀)・柱穴	古代土師器・須恵器 瓦器・中世土師器・須恵器				

熊取町埋蔵文化財調査報告第39集

小垣内西遺跡発掘調査概要報告書・I

発行日 平成14年3月31日

編集・発行 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号

印刷 泉南ムカイ精版印刷株式会社